

花小路とともに

居酒屋「四郎兵衛」店主
志鎌 寛氏



花小路で居酒屋を開いたのが昭和46年(1971)ですから、かれこれ半世紀にもなるのでしょうか。あれやこれやと、いろんな事がありましたがお客さまに恵まれて、女房(寿江)と2人

元気に商っております。

昭和18年、山形市八日町の六榎神社北側参道に沿った国鉄職員の二男坊に生まれ、高校を卒業後上京、秋葉原の日の丸電気(石丸電気の前身)に就職、テレビやステレオを売っております。同じ客商売をするなら華やかで面白いホテルで、と思い立ち、虎ノ門のオークラ、紀尾井坂のニューオータニでウェイターに転職。巨人の長嶋、王選手の結婚式を手伝わせていただきました。丸の内の東京會館に勤めていた山梨県出身の女房と知り合い、「東京は一生暮らすところではない。一緒に店を始めよう」と、山形に帰って来たのは26歳。「脱サラ」という言葉が流行し始めたころです。

もっとも、わずかな退職金は運転資金に回すため、花小路に借りた店舗を、「内装なんかしたことがない」とこぼす幼なじみの大工を引っ張り出し、「オレが言うように作ればいい」と、一緒に汗を流しました。カウンター八席の小さ

な店でした。屋号の「四郎兵衛」は、父と同じく国鉄職員だった祖父の名を頂戴しました。

今の場所に移ったのは38年ほど前です。「上は大臣から下は〇〇まで…」という言葉がありますが、いろんな方が足を運んでくださいました。当時の花小路は、昼は三味線や琴の音が流れ、夕暮れになると勤め帰りのサラリーマンや県庁職員で、小路はすれ違うのがやっとの賑わい、夜の更けるまであちらこちらの店から、毎晩“由緒正しき酔漢”の大声が聞こえておりました。

千歳館の澤渡和郎氏の駐車場で、「花小路まつり」と銘打って盆踊りを催したのもそのころです。ところが、県庁や警察署が松波に移転したあたりから、客足が遠のき、七日町一番街の多田一夫氏のアイデアで、秋田の升酒テーリングに倣って、ドリンクテーリングを始め、「歩くだけでも歩いてくれ」と今も行っている次第です。

「長く続いた秘訣は」とよく聞かれます。店それぞれでしょうが、私の場合はお客さんとの会話です。スポーツの話題、政治の話等々カウンターを挟んで丁々発止。名物の焼きそば、夏のダシ、秋のギンナン、冬の牡蠣とともに私の店の酒のつまみです。

それとうれしい出会いでしょうか。

「亡くなった母が花小路で店を開いていた。どこにあったのか知りたくて…」と遠くから訪ねて来た娘さんや、「転勤で山形を離れます。お世話になりました」と挨拶に来る若者。「孫を連れて来た」という常連さん。ありがたいものです。

来年は東京五輪です。「これをもって…」と頭をよぎりますが、最近、スマホで店を知ったという若い女性客が見えるようになりました。芸工大の学生たちが、リノベーションというのでしょうか、街に新たな活気をもたらしていると聞きます。

私は四郎兵衛を午後4時開店の「年金受給者の店」と称しております。大好きな花小路に、若い人も、年配者も、観光で訪れる人も、みんな一緒に和気あいあいと集う場があってもいいのでは一と思ってもおります。